

セジウィックとマーティノーと奴隷制廃止運動

— *Redwood* と *The Linwoods* を中心に —

中村 正廣

1837年 *London and Westminster Review* に掲載された論文 “Miss Sedgwick’s Works” の中で、当時の「アメリカ文学の現状と展望」を明らかにすべく米国で「最も名を馳せ」「アメリカ人の知性に合い、アメリカ人の心を元気づける」作家としてセジウィック (Catharine Maria Sedgwick) を俎上に載せた (“Sedgwick’s Works” 42) マーティノー (Harriet Martineau) は、フィクションを「共鳴する心」と「分析力」を兼ね備えた「実世間のトランスクリプト」と定義しつつ、1820年代、30年代のセジウィックの小説は「社会がよって立つ新しい主義・思想とその社会が発展拡大する際の新しい人間関係」を描写対象とせず「途方もない冒険」を頼みとしているとして、三流の「中産階級のフィクションの典型」であるとしている (“Sedgwick’s Works” 45-46)。この二十年間に出版されたセジウィックの五冊の「政治的」(Karcher 8)⁽¹⁾ 小説に対するマーティノーの個別の評価は彼女の米国史観と深く絡んだ小説観に基づいている。1822年に出版された *A New-England Tale; or, Sketches of New-England Character and Manners* の主たる目的は、「ニューイングランドの生活や風俗の素描の提示」というより「描写対象とするのは不愉快でもあり難しくもある」「独善的な宗教と真正の宗教の対比」にある (“Sedgwick’s Works” 46-47) とするマーティノーは、*Redwood: A Tale* (1824年出版) 批評において、黒人奴隷アフリック (Africk) の苦悩と屈辱が「巧みに語られ」、その悲痛さは「甚だ現実味がある」として高く評価しつつも、「シェイカー教徒の狂信と対比された(主人公) レッドウッド (Redwood) の不信心」は「書物以外にはどこにも存在しない種類のもの」としている (“Sedgwick’s Works” 49-50)。「英国のフィクションに全く前例の

ない」マサチューセッツの初期の歴史に由来するピューリタンや先住民など「多くの登場人物」が描写の対象となっている（“Sedgwick’s Works” 55）として *Hope Leslie; or, Early Times in the Massachusetts*（1827年出版）に称賛を送るマーティノーは、*The Linwoods; or, “Sixty Years Since” in America*（1835年出版）批評において、ジョージ・ワシントンやラファエレットのような歴史的偉人をフィクションに取り込むことに憂慮を示し、歴史的人物がフィクションに相応しい対象となるには「長い年月」が必要であり、その時間の経過により「読者の心から愛情や現実の連想が消え去り、作家の考えが歴史的人物の考えに取って代わることで不快感を覚えることはなくなる」としている（“Sedgwick’s Works” 58）。本稿では上記の恣意的とも見えるマーティノーの批評を生み出した *Redwood* と *The Linwoods* を十九世紀初頭の米国の奴隷制廃止運動と絡めて考察し、*The Linwoods* がセジウィックとマーティノーという英米の二人の女性作家の交流と不和・衝突から生まれた「政治的」小説であることを論じる。

マーティノーは1834年9月から1836年7月までおよそ二年に亘って米国各地を旅行し、1837年その成果を *Society in America* として発表、米国の政治的、社会的、道徳的問題について舌鋒鋭い批判を展開している。この「哲学と事実の複合体」（*Society in America* I: v）なるアメリカ社会論において、「様々な政体の経験のみならず人間性の原動力に基づいて推論することにより「新しい政体のあり方」（*Society in America* I: 2-3）を確立し「人類の持つ自治能力」（*Society in America* I: 3）を証明した国として、マーティノーは米国を高く評価してみせつつ、その実「自分が実際目にするものよりもより多くの証拠がその裏側にあるという疑い」を抱くほどに「強く確信している」ものが自分の中には確固として存在する（*Society in America* I: 354）と吐露するばかりか、「他の問題であればいかなるときも敢えてやることはない」持説の主張に終始することを言明しつつ、「奴隷制擁護論の全容は知り尽くしている」者として「現況下で奴隷制の正当性を立証したり弁明をしたりするために提示されうるいかなる議論」も認めるつもりはない（*Society in America* I: 354）と述べている。マーティノーの言うリアリズムは、「雪解けの最後の日の池の氷と同じく手で触ればすぐに砕け散るよう

な、議論の広大な表面」の背後を見透かすことであった (*Society in America* I: 355)⁽²⁾。

同じ階層と世代のほとんどすべての人と論争し疎遠になった (Webb 13) とも言われるマーティノーは、啓蒙主義も感傷主義も、そして物事をあるがままに忠実に描くことも、「哲学に新しい光を当て、道徳に例証と承認を与える」 (Webb 38) ことには繋がらないと考える作家であり、行動を改善と定義し、「人間が今どうあるかではなく、どうあるべきか、どうすれば更によくなれるかを示すことが小説の目的」 (Webb 40) とし、ディケンズやジョージ・エリオットまでもその批判の対象とした。この齒に衣着せぬ作家は、1835年ストックブリッジのセジウィック家に逗留し、奴隷制問題に関するセジウィック家の姿勢を「生来臆病である」 (*Autobiography* I: 376) 人々のものと書き記している。キャサリンと二人で散策した際にも、連邦はどうしても守る必要があると主張するキャサリンに、「(セジウィックが信じているように) 奴隷制を非難している神の意志が奴隷制を是認している連邦憲法と衝突するのであれば、残された問題は神の意志と人間の盟約のどちらが屈するかということだけだ」とはっきり伝え (*Autobiography* I: 376)、*「がさつに共和国を自慢する非常に多くの者とおどおどとそれに絶望する少数の者しかない」* 米国は独立宣言と共和政体という「高遠な政治計画」から政治的にも社会的にも「退化している」 (*Autobiography* II: 120) と断じている。

米国の奴隷制を論難するマーティノーについて、セジウィックは「彼女の精神と影響力が時代の精神に合った」が故に彼女が貴賤を問わず人々から「尊敬され、賞賛され、崇拜とまでは言わないとしても敬意を表されている」とジャーナルに書き記し (*Life and Letters* 241)、マーティノーを「神の素晴らしい賜り物を神の創造物のために役立てている」と評価しているが、一方でバーボールド (Anna Laetitia Barbauld)、エッジワース (Maria Edgeworth)、メアリー・サマーヴィル (Mary Somerville)、ジェイムソン (Anna Jameson) などの天才肌の女性たちと違い、マーティノーは多様性、立証性、到達度、想像力、創造性において劣っているとしている (*Life and Letters* 241)。「哲学と宗教の光で足元を照らしつつ社会全体のために誠実に貢献している」とマーティノーを評するセジウィックは、「心から共感を示しているという意

味では女性的」だが、「その情熱は理性によって必ずしもはっきりとは支えられておらず、時折独断的に近い形になり、余りに人権を愛するが故に行きすぎるところがある」と付け加えざるを得ない (*Life and Letters* 241-42) ⁽³⁾。

英国議会在英連邦内の奴隷制を禁止した 1833 年が英米両国の奴隷制廃止論の「分岐点の年」 (Lunardini 58) であったとするならば、そしてマーティノーが自伝に書き記したように 1832 年出版の *Demerara* が彼女の奴隷制廃止論への「完全な傾倒」(*Autobiography* I: 335) の年であるとするならば、セジウィックが奴隷制をフィクションの題材として扱う過程において英国人奴隷制廃止論者のマーティノーとの彼女の接触は二つの意味で非常に重要な意味を有している。一つはユニテリアンとして二人は 1830 年頃に交流を始めるが⁽⁴⁾、セジウィックの奴隷制に対する姿勢がマーティノーとの確執以前に確立し、以降一貫して揺らぐことはなかったということ、もうひとつは社会の悪弊との闘いをどう捉えるかにおいてふたりが全く異なった見解を持っていたということである。

セジウィックの周辺には奴隷制問題を含む米国の国家建設に緊密に関わる諸問題が彼女の誕生当時から顕在化していた。セジウィックが二歳のときアメリカ連邦議会上院議員に選ばれた父セオドア (Theodore Sedgwick) は上院議員を六期務め、その後下院議長、マサチューセッツ最高裁の判事を歴任、また姉たちも彼女が幼い頃に結婚し、彼女は「一家の大黒柱」であるマムベット (Mumbet)、独立軍に入隊したことのあるグリッピー、長年忠実に召使として働いた逃亡奴隷のサムソンなどアフリカ系アメリカ人の召使相手に生活を送る機会は自ずと多くなる (*Life and Letters* 40)。同時に父の社会的地位と彼の歓待と他人への思いやりを旨とする主義のために、彼女は親類縁者のみならず様々な階層の人間との接触を体験し、他人への思いやりを義務と考えるようになる。

父セオドアがセジウィック家に与えた環境は、母パメラ (Pamela Sedgwick) にとっては苦悩の種であり精神的に彼女を追い詰めていくことになるが、娘キャサリンにとってそれは建国後まもない合衆国の有り様とその前途に山積する難問の認識を与え、またその解決能力とその可能性への信頼を強めることになる。アメリカ独立宣言とマサチューセッツ憲法の発布を

知り自らの手で自由を得ようと訴訟のアドバイスを求めてやってきたマムベットを、セオドアはマサチューセッツが奴隷制を禁止する前の 1781 年に弁護士として裁判で自由にすることに成功している。また連邦主義者でもあった彼は娘キャサリンに連邦主義・民主主義の対立・衝突について考える機会を提供、後に兄弟とともにジェファーソンの主張する民主主義を信奉するようになる彼女も父の残した知的遺産を闇雲に消し去ることはなかった⁵⁾。

自由を獲得したマムベットこと Elizabeth Freeman はセジウィック家で働くようになり、キャサリンの母パメラが亡くなり、父セオドアがペネロープ (Penelope Russell) と再婚するまで「召使、仲間、友人」(Kelley 124) として彼女に大きな影響を与えることになる。マーティノーはセジウィックからこのマムベットの話を聞き 1838 年出版の *Retrospect of Western Travel* で不特定多数の自由黒人のひとりにすぎないという形で紹介しているが⁶⁾、自由を自らの力で勝ち取ったマムベットは、セジウィックにとって「その判断と意志がただの権威では決して従属されることはできない」(*Life and Letters* 41) 正義の女性であり、「不正と抑圧により道徳心を悪化させられ」、「自由を騙し取られ、大量に時間と体力を搾取されたため」、自由になった今「蔑まれ服従させられた国民」によくある、主人や雇い主の家で「些細な略奪」を行うような人種の一般的性格の「注目すべき例外」であった (*Life and Letters* 41-42)。

I do not believe that any amount of temptation could have induced Mumbet to swerve from truth. She knew nothing of the compromises of timidity, or the overwrought conscientiousness of bigotry. Truth was her nature—the offspring of courage and loyalty. In my childhood I clung to her with instinctive love and faith, and the more I know and observe of human nature, the higher does she rise above others, whatever may have been their instruction or accomplishment. In her the image of her Maker was cast in material so hard and pure that circumstances could not alter its outline or cloud its lustre.

(*Life and Letters* 43)

マムベットの死の一か月前にも「明晰な精神、強靱な判断力、素早く固い決断、鉄のような決意、清廉潔白、一瞬たりとも誘惑に耳を貸すこともない誠実さ、一直線から決して逸れることはない真実」(Kelley 125)とセジウィックが日誌に記したこの人物は、*Redwood*のアフリックや *The Linwoods* の中のローズ (Rose) の人物設定に大きな影響を与えている。

父セオドアが死ぬ間際に改宗したユニテリアニズムはキャサリンをさらに奴隷制問題に接近させる。ニューヨークで最初のユニテリアン派教会ができた年の翌年の 1821 年、彼女は正式にカルヴァン派教会から離れ、兄ヘンリーやロバートとともにユニテリアン派のメンバーとなっている。理由はチャニングやウェア (Henry Ware) といったユニテリアン派牧師の「宗教的感情」(Life 119) に引かれたからであった。

チャニングが 1809 年発表の原稿に手を加え、エッセイ“The Argument against Calvinism”を発表したのは、キャサリンがユニテリアンに改宗する一年前の 1820 年であった。チャニングはこのエッセイの中で、「人間の究極的拠り所は自分自身の精神であり、そうでなくてはならない」、「神を信頼するためには神が理解できる能力、神の存在の証拠を考察できる能力を信頼しなくてはならない」(Selected Writings 110)、もし「罪深く無力な者として神の手から生まれた者たちを永遠の不幸に追いやるのが神の廉直さ」だと言うのであれば、「このような廉直に人間は関心を持たないし、善の保証も、その自然の結果である悪も知りたくはない」(Selected Writings 117)と述べ、カルヴィニズムの予定説を否定し、また、1828年ロードアイランド州での説教“Likeness to God”において、「神との類似は最高の賜りもの」(Robinson 147)であり、それは「宇宙を楽しむための真の、そして唯一の準備である」(Robinson 148)としている。チャニングが亡くなる直前の 1842年8月1日のレノックスでの講演では、冒頭「自分がこの場に姿を見せたことへの弁明を許してほしい」(Selected Writings 269)と前置きし、二十年以上も前にキャサリンの兄のヘンリーという「あの高潔な青年で熱烈な博愛主義者」とともに「北部が奴隷制の諸悪に無関心であることを嘆かわしく思い、どのような手段でもってすればそれを排除できるかについて議論」し合ったことを明らかにし、十一年以上も前の西インド諸島のプランテーションでの

話として、経営者が変われば「最も穏やかな奴隷制であれいつでも最悪の奴隷制に変わりうる」(Robinson 270)ということを目の当たりにしてきたことを例に挙げ、「牛馬のように売り買いされ、他人の楽しみのためにこき使われ、他人の意志に従い他人の鞭の下で生きていく動産」(*Selected Writings* 271)としての奴隷は、「家庭生活の関係を形成しこれを楽しむ権利」を剥奪されており、その意味で奴隷制は「家庭の神聖をけがす」(*Selected Writings* 272)ものだと非難している⁽⁷⁾。

ここで重要なことは、チャニングを初めとするユニテリアン派の牧師たちは奴隷制廃止運動に言質を与えながらも、はっきりとギャリソン主義に対しては否定的であるばかりか、時にはこれを批判し攻撃したことである。マサチューセッツ沿岸の諸都市の富裕で博学のエリート集団の心を捉えたユニテリアニズムは、人間と社会の発展を進化的なものとみており、「理性、自由意思、規律、知能と道徳的能力を向上させるための手助けとしての厳しい勉学の重要性」(Curry and Valois 35)を強調した。「神性の火はすべての人間に存在し、どの個人も精神的成長の潜在的な能力ばかりか完成を成し遂げる能力も有している」と考えた(Curry and Valois 35)チャニングも「道徳的改革運動」(*Selected Writings* 26)として奴隷制廃止運動を捉えていた。チャニングは *Liberator* を長年購読しながらギャリソン(William Lloyd Garrison)との接触を避け(McKanan 71)、社会改革への関心からチャニングの説教を聞きに出かけることもあったギャリソンに対して、ウェアーは1834年 *Liberator* に対する検閲委員会を立ち上げようと図り、翌年にはギャリソン主義対策のライバル組織の設立の手助けもしている(McKanan 69)。

キャサリン・セジウィックがチャニングから大きな影響を受けたことは、処女作 *A New-England Tale* がピューリタニズムの予定説が孕む問題を主題にしていることから容易に理解できる。予定説がニューイングランド家庭に与える影響の大きさとその悲劇をユニテリアンの観点から捉え直そうとするセジウィックは、ロバート・ロイド(Robert Lloyd)に嫉妬を覚えるエドワード・アースキン(Edward Erskin)相手に主人公のジェイン・エルトン(Jane Elton)がロバートの宗派について説明を加える場面を設定し、貧

困と抑圧に悩まされた人々の擁護に邁進するクエーカー教徒の改革運動 (*New-England Tale* 127) の一つとして刑務所の改革、救貧法とともに奴隷制廃止運動を挙げている。短編 “Mary Dyre [sic]” でクエーカー教徒を「最も高潔な人々を最も崇高な行動に駆り立てた偉大なる主義」、「すべての自由の源である良心の自由」(164) を標榜する集団としたセジウィックが、クエーカーとしてのロイドを *A New-England Tale* に登場させたことは、セジウィックの関心事が第一作目から奴隷制にあったことを示している。

ロイドと同じように *A New-England Tale* を突き動かしているベット (*Crazy Bet*) の存在も奴隷制に対するセジウィックの大きな関心を暗示している。ジェインの伯母であり利己的なカルヴィン主義者のウィルソン夫人の息子デイヴィッド (David Wilson) の放蕩の犠牲になったメアリー (Mary Oakley) についての情報を、ジェインはジョン (John) から手に入れることになるが、ジェインは彼女をジョンの家に案内するベットとルーシー・ウィレット (Lucy Willett) の墓の前で待ち合わせ、そこでベットはジェインに無理やりルーシーの入水自殺の物語を語って聞かせる。その物語の中でシェーズの反乱の際ルーシーの恋人が殺されたという事実が明かされるが、これはマムベットが掠奪者からセジウィック家の財産を守った 1786 年～87 年の一大事件への言及であり、ベットの描写の背後にマムベットの存在をセジウィックが意識していたことを明らかにしている。更には、ベットがウィルソン夫人姉妹の高慢、偽善、利己主義を非難し、家に自分を泊めることを拒否した夫人の家のベッドを引き裂き、アフリカ系アメリカ人の Sukey に、「鏡を見てみな、そうすれば天国ではおまえがどれだけ白く見えるか、黒いしみがそこでは皆洗い落とされることが見えるさ」(*New-England Tale* 88) と話すとき、ピューリタニズムに潜む差別意識と奴隷制廃止問題が関連づけられていることは論を俟たない⁽⁸⁾。

セジウィックの周りの諸々の状況を勘案すれば、1824 年に彼女が発表した *Redwood* の主たるテーマが奴隷制問題となったのは必然の選択肢であった。この作品は「共和政体の持つ平等化の原則を貴族階級が最大限に免れてきた州」(*Redwood* I: 43) の生まれで裕福な農園主の息子でありながら、生来文学と美を愛し、現実の世界 (父の世界、南部の世界) に類似のものを見つけ

ることができずに苦悩するヘンリー・レッドウッド (Henry Redwood) を主人公とし、これに起因する彼自身の過去の罪の意識から彼がニューイングランドでの体験を通じて解き放たれていく物語である。その現実の世界で大きく彼の前に立ちはだかったのが奴隷制問題であった。

少年時代隣接する農園の少年エドマンド (Edmund Westall) に美德と人間愛を見ることでヘンリーは現実世界から逃避していたが、一人の人物にまつわる様々な出来事が彼を変容させる。その人物とは「巨大な体格とそれと釣り合いの取れた精神の資質を神から賜った」(Redwood I: 49) 黒人奴隷のアフリックである。奴隷の競売で妻と二人の娘がジョージア人の手に売られたとき、彼は「その強い愛情と不屈の気質」(Redwood I: 49) から「絶望的な唸り声」(Redwood I: 50) を上げ、憐れに思った周囲の者が一人息子を抱かせようやく彼は静かになる。こうして農園に連れて来られた二人であったが、その後不注意から農園監督の怒りを買った息子が監督に鞭打たれる事件が起こり、アフリックは息子をかばって自らの体に鞭を受けるが、その息子は翌日姿を消す。息子のことを思い自分の手で殺したとの噂が広がったとき、ヘンリーは息子の捕囚索を断ち切り自分自身の鎖の苦しみに男らしく耐え続けるこの男に思わず尊敬の念を抱く。奴隷仲間との繋がりを断ち孤立して生活を続けるこの人物の心を癒し、他の仲間との「壊れた同胞愛の絆を修復」(Redwood I: 51) してくれたのがキリスト教であった。しかし、農作業後も寝ずの勤行を続けたアフリックの体は弱り、ヘンリーの父は鞭打ちの刑と食事の減量を監督に指示、これを聞いていたヘンリーはアフリックの受けている「耐えがたい抑圧」(Redwood I: 52) に反発、父に優しくアフリックを扱うよう懇願する。暫くして女性の奴隷を鞭打ちから救おうとしたアフリックは逆に監督から激しく鞭打たれ、彼は地面を這うようにして小屋に戻り、翌日姿を消す。父は隣の農園の奴隷たちが匿っていると疑いヘンリーを探しに行かせるが、ヘンリーはアフリックを見つけても父に知らせるつもりはなく、あらん限りの力で彼に援助の手を差し伸べようとする。ウェストウォールの敷地の粗末な作りの小屋の中でエドマンドとアフリカ系アメリカ人女性の二人に見守られて横たわっているアフリックは、「信仰と希望と慈悲心の結合」(Redwood I: 55) の存在であるエドマンドに感謝しつつ、エドモンドの妻子

とその土地をやがて襲うことになる呪いから彼が救われることを祈りながら息を引き取る。

I would have given my life for one moment of freedom. I looked for revenge. I thought of my wife and my little ones; and I could have poured out the blood of white men, till it should run like the big waters over which they brought us. But the voice of God pierced to my heart; and I was an altered man. And when I prayed that blessed prayer, that I might be forgiven even as I forgave others, the fire in my heart was quenched, and the terrible storm that had raged here (and he pressed Edmund's hand on his naked breast) was laid; and there was peace, Mr. Edmund; God's peace. I was a slave, and I was wretched, but the sting was taken away. Do not pray for me, nor for mine. I have been on my knees for my helpless ones, night after night, and all night long, and my prayer is heard. But pray for your father's land, and your father's children. Pray to be saved from the curse that is coming. Oh! (he exclaimed,) and his voice became stronger, and its deep tones seemed to bear to our ears the sure words of prophecy; oh, I hear the cry of revenge; I hear the wailings of your wives and your little ones; and I see your fair lands drenched with their blood. Pray to God to save you in that day, for it will surely come. (*Redwood I: 55-56*)

長じて農園主となったエドモンドはこのアフリックの信仰心に応え、「奴隷制の呪い」を考えるが故に生前多くの奴隷に自由を与え、そして遺言としてすべての奴隷の解放を指示、希望する者にはプランテーションに残る自由も許し、「神から彼らが受け取り、彼らがそれを享受するのにふさわしくなることを望んで保留していたが、それを保留する権限を他人に与えたくない」という理由で農園を売却し、未亡人と息子を北部にやることを自分の意志で決定する (*Redwood I: 183-84*)。

しかしながら、ヘンリーにはエドモンドのような信奉者 (“enthusiast,” *Redwood I: 129*) の選択肢は許されない。「この非常に傷ついた男の魂に神が手を差し伸べたからこそ、彼の正当で容赦ない憎しみが許しに変わった」 (*Redwood I: 58*) のだと考えたヘンリーは、アフリックの遺体を農園に運び、他の奴隷のために父の利己主義を批判し、監督を首にするよう説得してそれに成功する。しかし、「国の恩人、国の誇り、天の恵み」 (*Redwood I: 43*) となりえたかもしれぬ彼の「仁愛のために身を捧げるという情熱」 (*Redwood I: 60*) は、父の南部的「遊惰」に加えて母の「徳の権利」 (*Redwood I: 44*) の主張の欠如のために「道徳的崇高さ (moral sublime) の力」 (*Redwood I: 44*) を失っていく。「人間を偏見の束縛 (slavery) から突然解放する (emancipate) することは不可能」であり、「今の支配的な体系 (prevailing systems) の迷信が崩壊するには数百年の年月が流れなくてはならない」 (*Redwood I: 46*) と考えるにとどまる。

大学卒業後郷里に戻ったヘンリーはエドモンドと親しく交際する中で「財産も親類もなく」かつ「宗教的な」 (*Redwood I: 61*) メアリー (Mary Erwine) と結婚の約束をする。財産と家柄に加え従妹との結婚話もあって妻との結婚は秘密裏に進め、財産相続か政界での栄達があれば晴れて結婚するつもりで友人とヨーロッパに旅立つ。残されたメアリーは宛先違いの手紙で自分が彼にとって負担となっていることを知り、身ごもったまま行方をくらます。ヨーロッパから戻ったヘンリーはこのことを知り苦悩するが、ほどなくして運命に身を任せ従妹と結婚する。こうしてヘンリーとメアリーの娘エレン (Ellen Bruce) とヘンリーとマリア (Maria Manning) の娘キャロライン (Caroline) という対照的な人物が織りなす物語が展開する。

カーチャー (Carolyn L. Karcher) は「風俗小説家、草分け的リアリスト」のみならず「初期政治小説家」としてのセジウィックの重要性を指摘し、ヘンリーを「ストウ夫人のオーガスティン・セントクレアの先駆者」として高く評価している (8-9)。内戦を引き起こすことなく奴隷制問題を終結させうるものは「忍耐強い北部による南部の再生とこの二つの地域の究極的和解」 (8-9) であり、それは遺産をすべて相続したエレンがキャロラインの子供をニューイングランドで教育するという形で物語が終わることからわかるとし

ている (9)。確かに、物語の中で父ヘンリーの苦悩やニューイングランドの誠実な労働に一切理解を示さず、労働＝奴隷のやるべきものとする典型的な南部的視点の持ち主であるキャロラインの過ち（ヘンリーとエレンの母の関係を記した唯一の証拠である手紙を彼女はエレンの箱から盗み取る）を許し、エレンとキャロラインの和解後にヘンリーの妻マリア・マニングの財産をすべてキャロラインに相続させ、ヘンリーをその財産の管理者とするセジウィックが、さらに物語を進めて、西インド諸島でキャロラインが亡くなり、娘の教育をエレンに託したいという彼女の希望をエレンが受け入れるという形で物語を終わらせているのは、エレンとキャロラインの代表する北部と南部の究極的和解を求めているセジウィックの強いメッセージであると言える。

しかしながら、奴隷制廃止問題と財産相続を深く絡めつつ物語を展開させるセジウィックにとって、キャロラインの悔悛とその子供の教育に具現化された「地の完全と天の美の確立と融和」(*Redwood II*: 288) よりもさらに重要なことがある。それはこの財産相続に関わる問題がシェイカーという宗教集団と相対峙して提示されていることである。マーティノーは *Redwood* 批評の中で「アメリカ作家の中で最も人気のある作家の頁」に現われた「痛ましい奴隷の物語」の蓋然性の高い描写を肯定しつつ、ヘンリーの不信心と対比して語られるシェイカー教の狂信は「不快である」(“Sedgwick’s Works” 49) としたが、ヘンリーが南部的生活の破綻の体験から得た不信心とシェイカー教徒の狂信の対照的描写は小説の四分の一を占めており、シェイカーに関連する物語の展開はセジウィックが財産相続と大きく関連する問題として奴隷制廃止問題を捉えていたことの証左である⁽⁹⁾。

キャロラインとともに北部を旅行していたヘンリーが馬車の事故で世話になるのがアレン家の人々で、彼らは「短期間ながら[シェイカーの]熱狂的狂信に支配された」(*Redwood I*: 129) とセジウィックは述べているが、英国のマンチェスターで 1747 年にクェーカーから分離して成立したシェイカーの勢力はアン・リー (Ann Lee) というカリスマ的指導者のもとでアメリカの東海岸からケンタッキー、オハイオ、インディアナにまで及んだ (*Redwood II*: 35)。ブリッジーズ (Lynn Bridgers) によればシェイカーとクェーカーの違いは次の三点に要約される。ひとつはシェイカーが禁欲主義 (celibacy)

を主張したのに対し、集団としてクェーカーは家族志向的であり、多くのクェーカーの家族はその信仰に関する領域で数世代にわたって活動したという点、二つ目は、外界との相互作用において、シェイカーは孤立主義であり、美しくデザインされた自分たちの共同体に引きさがり自己充足的生活を求めて労働したが、クェーカーはその宗教的信念に個人的精神的要素を色濃く持ちつつも外界とは積極的に関係を持ち、社会的正義の問題、平等の権利、刑務所や精神病院の人々の人間味溢れる扱いを求めたという点、最後にクェーカーは概してリーの再臨の教えを許容してはならず、内なる光と聖書の光に見た霊的權威に傾倒した点である (Bridgers 83-84)。

シェイカーはクェーカーに起因する多くの慣習 (簡素の強調、真の労働倫理の受容、経済的責任の信仰) を続け、クェーカーと同じく黒人奴隷制に積極的に反対し、「経済的奴隷制、性差別による奴隷制」にも批判的であった (Whitson 24)。貪欲や殺人などの罪が私的財産の存在に起因するとするシェイカーにとって、個人資産を支える家族と財産相続は破壊すべき主たる目標であり (Sobo 114)、もしセジウィックが「序文」で言うように、「宗教的主義がそれに付随する懷疑、希望、恐怖、熱情、偽善にも拘らず人格形成において強大な作因になる」 (*Redwood I: ix*) とするならば、ヘンリーが苦しむ南部的家父長制の破綻に代わるものとしてシェイカーの生活が提示されていると解釈できる。

しかしながら、エドマンド・ウェストールの宗教的情熱 (“enthusiasm” は17世紀清教徒及び18世紀のメソジスト派の宗教的態度に使われたが、ヘンリーの父が奴隷に布教を許したのは「熱狂的メソジスト派かモラヴィア教徒」 (*Redwood I: 51*) であったとされている) とは違い、シェイカーの指導者アン・リーが「慈悲深い人からは狂信者、厳しく見る人からは詐欺師とも見なされた」 (*Redwood I: 129*) と評される物語において、シェイカーリズムが「美德に熱情を与え真実に信頼を与える」 (*Redwood I: x*) 機能を果たすことは許されてはいない。セジウィックはシェイカーの「勤勉、創意工夫、秩序、つましさ、節制」 (*Redwood II: 37*) に関してはいかなる人間も賞賛を与えざるを得ないと認めつつも、エミリー (Emily) の父ジャスティン (Justin Allen) はシェイカーの妄想から解放された後に独身の伯父の財産を引き継ぎ、「義

務の道を一直線前に向かって進み、質素で純真」(*Redwood I*: 130) な女性と結婚、この女性によってヘンリーの娘エレンは育てられ、そのエレンの「愛と和解」(*Redwood I*: 94) の力でヘンリーの信仰は蘇る。これとは対照的に、ジャスティンの妹で最後までシェイカー教を信じるスーザン・アレン (*Susan Allen*) は、ともにシェイカーの村で暮らす姪のエミリーにルーベン (*Reuben Harrington*) の欲望の刃が向かうのを止めることはできず、そればかりかエミリーを脅して村から出奔する彼は村の全財産を持ち逃げすることまでやってのけようとする。*Society in America* においてシェイカーの否定的側面を指摘した (*II*: 54-65) マーティノーが、このシェイカーの物語について「誤った宗教」を人の目に晒すのは「例外なく不愉快である」(“*Sedgwick’s Works*” 49) と評したのは、過激な奴隷制廃止論に対するセジウィックの懐疑的姿勢を読み取ったからである⁽¹⁰⁾。

Redwood に続く *Hope Leslie* (1827) においてセジウィックはウィンスロップ (*John Winthrop*) に家族的愛情を付与することでピューリタニズムに共和主義を読み込んでいる (cf. Nakamura) が、奴隷制廃止運動という観点から 1830 年出版の *Clarence* のストーリーには少し詳しく触れておく必要がある。この小説は「富が貴族主義と社交界の基盤となっている社会」と「自然の最も崇高な姿と最も胸を打つ諸相と触れあい親しむことのできる質素な状態の社会」(*Clarence* 137) を対峙的に提示し、前者を代表するレイトン夫妻からその娘でかつ又その犠牲者でもあるエミリー (*Emilie Layton*) を、後者を代表するクラレンス親子が救う物語であるが、興味深いのは、ガートルード (*Gertrude Clarence*) の祖父チャールズ (*Charles Clarence*) 本人の言葉で語られる西インド諸島における混血女性との間に生まれた混血児の誕生と自殺である。チャールズ・クラレンスは英国人で、メアリー (*Mary Temple*) との間に子供 (ガートルードの父 *Charles Clarence*) をもうけるが、財産を父から譲り受け社交界、政界に生きる長男フランシス (*Francis Clarence*) の利己主義のために商業の世界に身を置かざるをえず、兄に妻と子供を預け、単身「収益の上がる商売のできる」(*Clarence* 83) 西インド諸島に赴く。二年して妻と兄の不倫の噂が伝わり、彼はヨーロッパに戻り妻と二人でパリに滞在していた兄を殺し、一人息子を連れて西インド諸島に戻り、

懸命に働く。五歳になった息子の健康を考えて召使のジョン (John Savil) に金を持たせ英国に送るが、金に目がくらんだジョンはチャールズとともに米国行きの船に潜り込み、米国に逃げる。息子たちが乗り込んだと思っていた英国行きの船が座礁し、父チャールズの懸命の搜索も空しく二人は行方知れず、息子との死別の悲しみを乗り越えようとするかのようにチャールズはすべてを富の獲得に向け、仕事に精出す。やがて「アフリカ人の血がわずかに入り」(Clarence 85) ながらもヨーロッパで教育を受けた多才で上品で類まれな美の持ち主エリー・クレロン (Eli Clairon) と愛し合うようになり、息子マーチェリーニ (Marcelline) が生まれる。しかし、妻は他の男性と強制的に結婚させようとする父の意志に逆らって、閉じ込められた船から入水自殺する。神の呪いしか受けない自分の運命を疑うチャールズは息子の養育を義母に任せ、その後再会するも、猜疑心から息子の軽率な罪をも糾弾し、やがてチャールズの財産を狙う甥のウィンステッド・クラレンス (Winstead Clarence) の欲望の餌食となり放蕩によって墮落させられたマーチェリーニはピストル自殺する。もう一人の息子チャールズ・クラレンスはチャールズ・キャロルという名前をサヴィルから与えられてニューヨークの救貧院に預けられるが、ガートルードと結ばれることになるジェラルド・ロスコー (Gerald Roscoe) の伯父によってその救貧院から引き取られ、コロンビア大学卒業まで愛情を持って育てられ、やがて父チャールズの財産を引き継ぐ。

A New-England Tale でディヴィッド・ウィルソンの放蕩の犠牲になったのがその両親が西インド諸島に働きに出かけ熱病で亡くなったメアリー・オークレイであり、またディヴィッドが脱獄して逃亡し海賊となるのも西インド諸島であること、また、*Redwood* のキャロラインが夫フィッツジェラルドとともに向かった先が、そして彼女を死に至らしめたのが西インド諸島であることを考慮すれば、*Clarence* の人物群の多くが西インド諸島と関連付けて描写されるのは驚くには当たらない。レイトンと賭博を通じて親しくなりそのいかさまを脅迫して彼の娘エミリーを手に入れようとするペドリロ (Pedrillo) やチャールズ・クラレンスの遺産相続を狙うエドモンド (Edmund Clarence) 、またその指示に従って動く弁護士ライダー (John Rider) だけではなく、主人公ガートルードの過去も西インド諸島に関連づけ

られていることは、セジウィックの世界で奴隷制と北部が深く絡み合っていることの証左である⁽¹¹⁾。

他方でヴァージニア出身のマリオン兄妹には「北部人の偏見や頑迷さ」故に「南部の同胞にあるとされる性格」とは「正反対」の「純粋な共和主義の愛国者の心情」(*Clarence* 216) が付与され、「奴隷も含めすべての人間に寛大」(*Clarence* 217) であり、兄のランドルフ (*Randolph Marion*) は「過度の持っているものはひとつもなく、紳士的特色と性質をたっぷりと持ち」(*Clarence* 217)、妹のオーガスタ (*Augusta Marion*) には *Redwood* のキャロラインのような「南部の貴婦人の振る舞いの特色である、ありふれたおしとやかや丁重さ」(*Clarence* 217) はなく、その聡明な言動は皆の好感を得ている。それどころかエミリーたちがペドリロの魔の手から逃げるのに理想的な地域はクラレンス (キャロル) がニューヨークの都会の喧騒から逃げるようにして離れた先のニューイングランドのクラレンスヴィルではなく南部とされるのである。マーティノーが “*Miss Sedgwick’s Works*” においてこの作品に言及していないのはセジウィックによるこの混血児と南部の描写に原因があることは明らかである。

奴隷解放と財産権問題を取り上げた *Redwood*、異人種混交を扱った *Clarence* に続いてセジウィックは 1835 年 *The Linwoods* を発表している。*Redwood* をセジウィックの著作の中で「最も面白くない」 (“*Sedgwick’s Works*” 49) 作品と評したマーティノーは、*The Linwoods* について「物語が革命戦争の話であるために小説の様々な冒険は蓋然性の欠如という過ちを犯していないものの、それでもなお読者には疲れるものである」と言いつつ、ワシントンやラファイエットなど「その生の声が現在世代の耳からほとんど消えていない英雄たち」はその「現実の影響や関係」が強烈なためフィクションにとって適切な主題とは言えないとしている (“*Sedgwick’s Works*” 57)。この作品は「迫る地域間衝突の解決の糸口」を見い出せずにはいたセジウィックが「アメリカ人に[連邦という]共有遺産を思い出させようとしてアメリカ史初期の政治論争を回想した」作品 (*Weierman* 133-34)⁽¹²⁾ だが、マーティノーの批評を先取りした構造を持っており、その意味でマーティノーがアメリカの退化の判断基準としたアメリカの信条の源泉である独立革命について

セジウィックがマーティノーを意識しつつ書いたと言える作品でもある。

英国王に忠誠を示すロバート・リンウッド (Robert Linwood)、その息子で独立派のハーバート (Herbert)、両親の政治信条に忠誠を誓いながらも兄の自主独往に賛同することで自らの自己信頼を見せることになるイザベラ (Isabella)、「ピルグリム・ファーザーズが種を播き後世に伝えられた自由の精神」 (*Linwoods I*: 102) が独立と自治の権利を求めさせたと信じてやまないエリオット・リー (Eliot Lee) とその妹のベシー (Bessie)、英国の多くの貴族と姻戚関係にあり「貴族的な封建的なもの」 (*Linwoods I*: 68) に惹かれるジャスパー・メレディス (Jaspar Meredith)、その許嫁でありながらハーバートを愛するアン・シートン (Ann Seton) など、多くの人物群が英国支持派と独立派の衝突、貴族主義と「神が[人間の]心と交わることのできる自然」 (*Linwoods I*: 260) の対立の中から和解を見出し、「人間を新しい関係に置くことで、我々の革命闘争は人類をまとめ上げる絆を新しい力と美でしばしば示した」 (*Linwoods I*: 163) という歴史的事実が物語の中で明かされていく。アメリカを「徳と才能という素晴らしい源泉と、勤勉と儉約という共同資本に必ずや祝福を与え、幸福にとって必要であり徳にも安全なだけの世俗的繁栄を報いてくれる」 (*Linwoods II*: 286) 国と捉えるセジウィックにとって、南部人がピューリタンの儉約を軽蔑し、ピューリタンが南部人の中に「奴隷所有者の膨れ上がったプライドや監督の冷酷非情さ」 (*Linwoods I*: 256-67) しか見ようとしないのは、「自然の調和を乱し、神が人間と人間を結びつけた絆を断ち切る」 (*Linwoods I*: 256) 偏見でしかない。

この連邦という共有遺産の中でアフリカ系アメリカ人に与えられている位置づけは奴隷制廃止問題を捉えるセジウィックの米国史観と深く関わっている。ふたりの人物がセジウィックのこの問題への姿勢を明らかにしてくれる。ひとりはセジウィックが肯定的に描く女性ローズであり、もうひとりは彼女が否定的に捉える男性のジュピター (Jupiter) である。ローズはリンウッド家で乳母の役割を果たし、あらゆる種類の贈り物が彼女の価値に対する主人の評価を証明していたが、イザベラが八歳のとき彼女の運命を変える小さな事件が起こる。イザベラからシルクのドレスをプレゼントされたローズは喜びながらも、自分は奴隷であり、リンウッドの家族にどんなに親切されても、

ただくびきが軽くなるだけでくびきに変わりはない、「今日自由になれるのなら明日死んでもよい」(*Linwoods I: 221*)と言って泣き出す。イザベラの心にある「真実と独立の精神」(*Linwoods I: 222*)はローズの声に反応し、学校でフランス語の賞を取った褒美としてローズの解放証明書を父に作成させる。

「自然権の回復」(*Linwoods I: 224*)によって奴隷制の足枷から解放されリンウッド家で確固たる地位を得たローズは、ハーバートの救出劇に加わることでその盟友ともなる。独立軍に入隊したハーバートは家族に会うためにニューヨークに潜入、英軍に捕まりスパイとして収監されるが、このハーバートの脱獄計画において彼女は彼と入れ替わるという大役を担う。幾日も牢獄を訪れて敵の警戒心を解いた彼女は脱獄決行の日に彼と入れ替わり、彼を無事に脱出させる。外套とアンとイザベラが作ったマスクとかつらを渡されたハーバートは、アフリカ系アメリカ人の髪のかつらをつけながら、「自分の頭よりもずっと優れた、もっと有能で洞察力のある頭を覆っている羊毛状の髪は知っているが、黒い肌の下で脈打つ心臓よりも気高い心臓を神は造られたことはない」(*Linwoods II: 232*)と感謝する。彼女の武勇譚はこれだけに終わらない。ローズに変装してハーバートが脱獄した後、正体が露呈した彼女は憲兵司令官のカニンガムを投げ倒し、ハーバートが無事に逃げられるまで押さえつけ、黒人の女に脅されたことをばらされたくないだろうと言い残して平然と牢獄から出ていく。

しかしながら、*The Linwoods*において独立戦争に参加するのを許されるのはこのローズに限られる。物語の冒頭イザベラの相談役のメアリー・アーチャー (Mary Archer) が奴隷の召使を多く使っているニューヨークの家庭にニューイングランドのベシーを招待すれば帰郷してから困ると言うので、イザベラはローズ以外の奴隷は要らないと答え、これに対してメアリーは「そうならば時折誤った方向に向かう精力も適切に使われることになるだろう」(*Linwoods I: 35*)と応じているが、二人とも奴隷解放に賛同しているわけではない。イザベラが主張しているのはローズ以外の奴隷は「災いの種」(*Linwoods I: 38*)でしかないということである。

「災いの種」の典型として登場するアフリカ系アメリカ人男性ジュピターは、「矯正しようのない口忠実」、「役立たずの厄介者」であり、「ローズ

がその糧食を供給するのが彼女の兵站部としての能力を超えている」(Linwoods I: 102) ためにリンウッド家からイザベラによって追い出される。英軍を追い出そうとする独立派には死しかなく、また英軍が去った後のニューヨークには何も残らないと言う彼の雑役夫仲間（「将軍」と彼は呼ばれている）と同じ「怠惰で奴隷根性のろくでなし」(Linwoods I: 226) であるジュピターが、「すべての人間は生まれながらにして自由で平等だ」と主張するハーバートの言葉を「すべての人間は生まれながらに白人で背が高い」(Linwoods I: 226) と読み替えるのは、アヴァローニ (Charlene Avallone) が述べているように「黒人の自由は人種的違いによって予め不可能なものになっている」(112) という彼の諦めである。

自由と独立を求めるアメリカの大義からジュピターは物語の冒頭において排除される。占い師のエフィ (Effie) のところへ向かうイザベラとベシーに付き添うジュピターが、日没も近いので引き返すよう忠告すると、イザベラはニューヨークの奴隷の反乱の話を持ち出して彼を脅す。「男の外見」はしているが「どうしようもない臆病者」(Linwoods I: 16) と彼を見なしている彼女は、絞首台が立っている丘を指し示してはアフリカ系アメリカ人の陰謀に加担した者たちが縛り首にされたことを彼に思い出させる。彼の祖母と叔母が犠牲になったという彼の言葉に彼女は同情どころか関心を見せることもない。狂乱状態になったジュピターが彼女の前から姿を消すという形で物語は始まるのである。

1741年の黒人奴隷による陰謀とされた反乱はニューヨークの急増する奴隷と貧乏白人の経済上の競争に加えて宗教上の狂信が一役買った事件であり (Rogers 51)、やがて奴隷制を禁止する方向にニューヨークを向かわせた反乱であった。アヴァローニはセジウィックによるこの奴隷の反乱の喜劇化は1830年代の奴隷の反乱に対する全米的不安を緩和することを彼女が狙ったものであり (101)、また、奴隷制廃止論者のチャイルド (Lydia Maria Child) の収入減や社会的地位の低下を目の当たりにしたセジウィック自身の個人的勇気の欠如 (106) の結果としているが、他方で奴隷の自由獲得が奴隷の自らの意志と意識の変革と関連づけられていることを見逃してはならない。

物語の結末部分で凱旋する独立軍を眺めるリンウッド家の人々の前を仲間の「将軍」とともにジュピターが通りかかる場面の描写がそれを明らかにしている。ロバート・リンウッドは「平等化するアメリカのいささか無節制とも言うべきもの」の存在を信じざるを得ないと思いつつも、ジュピターが発するところの「パーティでワシントン将軍と食事をともにする」という「土地均分論 (agrarianism)」 (*Linwoods II: 279*) に驚愕する。ジュピターは英軍退却後のニューヨーク再建のための労働は自分に合わず、自分は「荘園」に移り住むと豪語する (*Linwoods II: 280*) が、娘のイザベラは「いかなる怠け者」 (*Linwoods II: 280*) も独立後のニューヨークの再建には必要ではないと断言する。ジュピターはこの彼女の言葉を「上流社会と彼が称する人々に分類されたもの」と解釈し、一人悦に入り二人の前から立ち去る。これは「自由と自治を求める人間の生まれながらの欲求」からすれば製造業ではなく農業が「人間性に最もふさわしい活動である」 (Thornton 47) と唱えたジョージ・ワシントンの土地均分論にジュピターが値しない人物であることを示している。他方において、*The Linwoods* においてワシントン将軍の子供時代からの隣人として登場する南部人のリヴァン (Ruthven) は、「高貴さと親切心」、「虚栄心とも高慢とも傲慢さとも全く違う何か、個人のものではなく彼がその一部であるところの人民の適切な優越意識がある」 (*Linwoods I: 130*) とされる。「国民の気質を弱らせ国家の衰退を早めるのは柔弱さと贅沢である」とする「伝統的な共和主義のディスコース」 (Knadler15) の中で、贅沢と貴族主義をジャスパーと英国人にあてがい、アフリカ系アメリカ人の反乱を過去のものとし、柔弱さと怠惰をアフリカ系アメリカ人男性に読み込むことで、セジウィックはアメリカのすべての地域がひとつの国家として統括されることを求めたとと言える。

マーティノーがアメリカを訪れた 1834 年、チャイルドから *An Appeal in Favor of That Class of Americans Called Africans* (1833 年出版) を贈呈され、奴隷制反対のギフトブック *Oasis* への投稿を勧められたとき、セジウィックはチャイルドの主張する奴隷の即時解放が奴隷にとって最善とは思わないと書き送り、奴隷の自由と自治にふさわしい状態を解放の前提条件として掲げ、既になされた「犯罪の結果を免れる最も安全な方法を見出すのが叡知

のなすべきことである」(qtd. in Weierman 133) と述べている。ワイアーマン (Karen Woods Weierman) によれば、1830 年代初頭セジウィックは反奴隷制の原稿「自分が始め断念した奴隷の物語」を書き始め、奴隷制への抵抗、アフリカ系アメリカ人の人種的劣等を主張する骨相学への批判、漸次的解放について言及している (126-33) が、物語は未完に終わり、五十頁にわたるこの手書き原稿は出版されることはなかった。奴隷制問題に対するセジウィックの慎重な姿勢は、マムベットの生き様を描いた “Slavery in New England” がマムベットの死去からおよそ二十年後の 1853 年 *Bentley's Miscellany* に発表されたことから窺い知ることができる。

チャイルドはセジウィックを「所信を貫く精神的勇氣」に欠けていると批判 (*Appeal XLIV*) したが、奴隷制廃止論者の主義主張の主唱者としてみなされたくないというセジウィックの頑なな姿勢は生涯変わることはなかった。1860 年 3 月 10 日付けのチャニング夫人 (Susan Channing) 宛の手紙の中で、1856 年にイライザ・フォレン (Eliza Cabot Follen) の強い誘いを断り切れずボストンの奴隷制反対フェアに出席したこともあるセジウィックは、フォレンから全国奴隷制反対協会の会合に誘われた際にそれを断ったことを明かし、「アメリカ国民を激しく揺り動かす人類 (humanity) の大問題」に心から共感を覚えないわけではないと言明する彼女は、その理由として「あの高潔な殉教者ジョン・ブラウン (John Brown) の死に際して余りに多くのことが節度を欠いて話され、余りに軽率に強く主張されている」(*Life and Letters* 378) ことを挙げている。翌年 1861 年 1 月 5 日付けのラッセル夫人 (Penelope Russell) 宛の手紙の中で、「乳離れしていない子供が母の胸にしがみついて離れないのと同じように連邦国家としての合衆国に執着している」(*Life and Letters* 388-89) ことを認め、「奴隷制廃止の狂信」と「極端な譲歩と保守主義」しかない今のアメリカでは、神が「南部の自殺的狂気が荒れ狂い闊歩するのを許され、奴隷制が毒しているこの国からそれを消し去るという偉大な目的を成し遂げられる」のを「畏敬の念を持って見守るしかない」(*Life and Letters* 389) と述べている。ここには「革新主義者を敵から隔ててしまう党派心を鮮明にすることよりも家族の情愛と感傷的な同一化で進歩的な有権者を広げていく」(McKanan 19) ことを目指す彼女の思いとは全く

異なる方向へ動いていくアメリカの将来への諦観にも似た彼女の批判がある。同年2月にはチャニング夫人に宛てて、南部脱退は認めざるを得ないとしながらも、アメリカの「未来には強い希望、いや自信と言ってもよいものを抱いて」おり、「正義の人々によってまかれた種、人類全体 (the whole family) のために愛と正義をもってまかれた種」である「アメリカの制度の本質の更なる発展への信念」は揺るがないとし、「最大多数の最大幸福という初めての実験」が「成就することなく失敗することを神は許さない」、何故なら「アメリカ国民には生命と健康という基本的要素があり、偉大な自然法と調和している」からだと述べている (*Life and Letters* 389)。マーティノーが言うところの「奴隷制を非難している神の意志」と「奴隷制を是認している連邦憲法」はセジウィックにとって二律背反的な問題であり、教条主義的な立場で解決しうるものではなかった。*Redwood* で奴隷制問題の核心に迫ったセジウィックが、マーティノーとの交際の最中にマーティノーの米国史観と真っ向から対立する史観をつまびらかにして披露して見せた *The Linwoods* は、セジウィックの数ある「政治的」小説の中で最も政治的なものであったと言える。

注

- 1 この四作品については Susan Harris が父権への抵抗としての政治的小説という観点から論じている。Harris 272-85 を参照。
- 2 マーティノーは 1836 年に出版された “Essays on the Art of Thinking” において、「前人未踏の広大な領域を取り扱う際は、我々は用意周到な態度でもって、偏見なく新しい考えを受け入れるよう我々の知性は鍛錬されるべきであり、周知の真実はしかるべきところで適用しつつそれを忘れ去る覚悟を決めて、新しい概念の形成に向けて強化されるべきものである」(74) と述べている。*Society in America* における彼女の断固とした決意とアメリカ人に対する疑心は、彼女を騙して虚偽の物語を出版させたと言語する二人のアメリカ紳士の件もあって激しい言葉となって現れたものであり、マーティノーが自らの体験の記録の正

確さを読者に印象づけるためのものであったことが『自伝』(*Autobiography I: 334*)に記されている。

- 3 1841年セジウィックは十五か月にわたるヨーロッパ旅行の体験をまとめた *Letters from Abroad to Kindred at Home* を発表し、子供に教育を与え、自らの農場を改良し、自ら教会と牧師を選択し、自らの力で統治者を選ぶ米国の民主主義を強調している (*Letters from Abroad I: 250*)。その中で「子供の発達と家庭の幸福に身を捧げた結婚生活上の義務をしっかりと守る」「魅力的で敬愛すべき」(*Letters from Abroad I: 108*) アメリカ人既婚女性の対極にある「自分の人格を思う存分発揮している」「力強い」(*Letters from Abroad I: 108*) 英国人女性として、二人の英国人女性マーティノーとアナ・ジェイムソン (Anna Jameson) を想定していることを読者に知らせると同時に、後者のジェイムソンが女性の権利の主張において英米で名を馳せ、奴隷制廃止運動にも積極的でありながら、「その家庭生活の美德と魅力」が「その稀有な能力、学識、その会話の無類の豊かさ」と魅力」を凌いでいたからこそ彼女は「怪物」にならずにすんでいることを知りうれしかったと記している (*Letters from Abroad I: 98 fn*)。非嫡出子に苦悩する友人に最後まで「底なしの不撓の愛」(Pearsall 256) を見せたこの美術評論家でもあり伝記作家、歴史家でもあったジェイムソンは、女性の財産権の議会への請願に加わったばかりか、不十分な教育しか受けていない女性家庭教師や若い女性労働者が低賃金で搾取されていることを訴え、教育を受けた女性がカトリック教会に代わって病院や刑務所、孤児施設や幼児学校で働くことを提唱した (Neff 234)。奴隷制に反対であったジェイムソンは1838年に *Winter Sketches and Summer Rambles in Canada* を出版し、カナダへの逃亡奴隷の苦悩について語っているが、1853年にウィルキンス (Marcella Fanny Wilkins) がジェイムソンに敬意を表して *The Slave Son* を献呈した言葉の中にも、ジェイムソンの提唱した平等と自由を求める人間の「虐げられた人間性」とそれに差し伸べられる「キリスト教徒の救いの手」への言及がある (Winer 96)。のみならず病床の父の看護や姪の養育を自ら進んで引き受けたジェイムソンは、夫と離婚後財産権や子供の親権問題でアメリカに出かけた際セジウィックに会っており、前夫の冷酷な対応に絶望した彼女の語られることのない苦悩にセジウィックは同情し、英国で再会した彼女が「安全弁」

としての「女性的な家庭の義務」を果たすことで「倦怠という悪魔」から身を守っていることに安堵している (*Life and Letters* 276-77)。セジウィックがマーティノーの利己主義的姿勢について抱いていた不快感については、Stearns 537-41 を参照。

- 4 1830 年代初頭奴隷制廃止論者と奴隷制支持論者との間に対話があったことについては、中村、259 を参照。
- 5 セジウィックは幼年期を回想して当時の「偏見」の影響で民主党員は皆「貪欲で不誠実で低俗」だと思っていた (*Life and Letters* 65) と書き記しているが、彼女の慎重な政治的姿勢は1834年 *Token* 誌に発表された“A Reminiscence of Federalism” (マーティノーへの献辞が付された 1835 年出版の *Tales and Sketches* では最初の短編として登場する) に顕著である。ヴァーモント州の村キャリントンに場面設定された地元議会選挙で、南部奴隷制を忌み嫌う民主党員の祖父ヘイフォード (Hayford) と、「極端な連邦主義の説教”(“Reminiscence” 43) で教区の大多数から敬遠されているアトウッド (Atwood) の間で板挟みになりながらも、アトウッドの娘ファニィ (Fanny Atwood) への愛と「分別と理性」 (“Reminiscence” 36) 故に主人公ランドルフ (Randolph) は「無節操な扇動政治家」 (“Reminiscence” 35) よりも連邦党員に投票するが、第一回投票では票数同数で決まらず、第二回投票が行われるも、その投票の前にアトウッドが投票所を後にすることで民主党が勝利、しかしその夜の民主党の祝賀会でヘイフォードが脳卒中で亡くなったことを機にランドルフは祖父の財産相続を放棄して「自らの才能と努力」 (“Reminiscence” 43) を頼みに人生のスタートを切る、という物語である。セジウィックは物語の冒頭、政党間の衝突を引き起こす諸問題を川に浮かぶ「沈み木」に例え、川面を乱すその沈み木も「偶然や時間」がやがて「その自然の穏やかな調和」によって押し流してくれるものであるとしている (“Reminiscence” 9-10)。
- 6 *Retrospect of Western Travel* の中で、マーティノーはマムベットことエリザベス・フリーマンがセオドア・セジウィックの助力を得てシェフィールドのアッシュレイ大佐から自由を獲得したこと、男性不在の中でストックブリッジの村がマムベットの力で救われたこと、彼女がセジウィック家の墓地に眠っていること (*Retrospect of Western Travel* 47) を挙げつつも、「行動力 (energy) と

才能 (talent)」に関して言えばマムベットの「勝る者も匹敵する者もないとは言いがたい」とし、「忠誠心にしてもしかり」と述べている (49)。黒人奴隷は「程度の差こそあれ、持って生まれた意志の強さや教育による心の修練に比例して奴隷制度によって卑しめられる」ものであり、「下等な者は私権の享有と身体的自由よりも義務と心配事からの解放を選択する」のに対し、「一流の者は全くそれとは対照的なものを好む」とした (44)。

- 7 マーティノーがアメリカを訪問した当時のアメリカのユニテリアンはそのほとんどが解放奴隷のリベリア入植計画を支持しており、チャニングは奴隷制反対を表明した数少ないユリテリアンの一人であった (Hill and Hoecker-Drysdale 36)。キャサリンの兄弟で奴隷制反対の意思表示を行ったのは兄ヘンリーだけではない。セジウィックの兄セオドア (Theodore II) は 1831 年 2 月ストックブリッジ文化会館 (Stockbridge Lyceum) で “The Practicability of the Abolition of Slavery” という表題で奴隷制反対演説を行っている。
- 8 Timothy Kenslea はクレイジー・ベットのママベットと同じ名前を与えられていることを認めながらも、1807 年に他界したセジウィックの母パメラと彼女を結びつけている (32)。また、南部人が登場する後の三作品との関連から付け加えると、この作品にはヴァージニア人としてリヴィングトンが登場し、アースキンとの決闘ですくんでしまうという醜態を見せるが、その彼は「北部人の間で紳士階級、高潔さ、崇高な勇気と同義で通る」 (*New-England Tale* 150) ヴァージニア人でないことが決闘後に判明する。
- 9 1825 年 2 月の Charles Sedgwick 宛の手紙の中でセジウィックは父セオドアの「黒人のための尽力とシェイカー教徒のための仲裁」 (*Life and Letters* 173) の正確な年代を確認しているが、彼女が黒人奴隷問題とシェイカー教徒問題の間に密接な関係を見ていたことを示唆する記録である。
- 10 マーティノーはセジウィックと違い「すべての財産が共有権として所有される共同生活」 (Sobo and Bell 114) に疑いを抱くことはなかった。 *Society in America* の中で彼女はシェイカー教徒の「超俗的な高慢、狂気の虚栄心、知性の麻痺、知力の粗野ぶり」には言及しているが、彼らの経済的原則や道義心を「健全な」ものと見ていた (*Society in America* II: 59)。彼らの富を目にしたマーティノーは、「多くの徐々に蓄積された富に加えて外部への物の販売が、こ

のような無知で思い上がった惰性的な社会における協力と財産共有の結果であるとするならば、教育によって刺激を与えられ、神が人間の手の届くところに置かれたすべての恩恵を享有することで活気づけられた更に賢明な人々の間では、同じような人間関係の原理がどれだけ多くのことを達成しうるだろうか」と称賛を惜しまない (*Society in America II*: 57)。シェイカーの禁欲主義は「彼らが決まりきった日常の仕事以外に他の興味ある思考対象を持たず、いかなる人生目標も、いかなる欲望も、いかなる希望も、いかなる目新しい経験もない」 (*Society in America II*: 60) ためであるとしている。フェデラリストは当時「市民社会の基盤と自由の保障」としてだけでなく「人間の能力の多様さ」を守るという政府の目的を達成するためのものとして財産を捉えており (Ely 49)、セジウィックはこの財産所有についての考えに近いものを持っていたと思われる。

- 11 セジウィックの父方の祖先はクロムウェル (Oliver Cromwell) が西インド諸島に派遣した総督ロバート・セジウィック (Robert Sedgwick) であり、スペインによって西インド諸島で始められた黒人奴隷制はセジウィックにとって決して南部固有の問題ではなかった。
- 12 ワイアーマンの論考とは逆に、同時期のセジウィックがアフリカ系アメリカ人の暴動や混血への反発など人種的不安の中にあっただとするのが Avallone 97-133 である。アフリカ系アメリカ人以外の人々による暴動に対するセジウィックの不安については、Karafilis xxv と Daly 137 を参照。

引用文献

Avallone, Charlene. "Catharine Sedgwick's White Nation-Making: Historical Fiction and *The Linwoods*." *ESQ*, 55, vol. 2 (2009): 97-133.

Bailey, Brigitte. "Tourism and Visual Subjection in *Letters from Abroad* and 'An Incident at Rome.'" *Catharine Maria Sedgwick: Critical Perspectives*. Eds. Lucinda Damon-Bach and Victoria Clements. Boston: Northeastern UP, 2003. 212-28.

Bridgers, Lynn. *The American Religious Experience: A Concise History*.

- Lanham: Rowman and Littlefield, 2006.
- Channing, William Ellery. *William Ellery Channing: Selected Writings*. Ed. David Robinson. New York: Paulist, 1985.
- Child, Lydia Maria. *An Appeal in Favor of That Class of Americans Called Africans*. Ed. Carolyn L. Karcher. Amherst: U of Massachusetts P, 1996.
- Curry, Richard O. and Karl E. Valois. "The Emergence of an Individualistic Ethos in American Society." *American Chameleon: Individualism in Trans-National Context*. Eds. Richard O. Curry and Lawrence B. Goodheart. Kent: Kent State UP, 1991. 20-43.
- Daly, Robert. "Reading Sedgwick Now: Empathy and Ethics in Early America." *Literature in the Early American Republic: Annual Studies on Cooper and His Contemporaries*, vol. 2 (2010): 131-52.
- Ely, James W., Jr. *The Guardian of Every Other Right: A Constitutional History of Property Rights*. New York: Oxford UP, 2008.
- Harris, Susan K. "The Limits of Authority: Catharine Maria Sedgwick and the Politics of Resistance." *Catharine Maria Sedgwick: Critical Perspectives*. 272-85.
- Hill, Michael R. and Susan Hoecker-Drysdale. *Harriet Martineau: Theoretical and Methodological Perspectives*. New York: Routledge, 2003.
- Karafilis, Maria. "Introduction" to *The Linwoods; or, "Sixty Years Since" in America* (Hanover, NH: UP of New England, 2002). xi-xxxviii.
- Karcher, Carolyn L. "Catharine Maria Sedgwick in Literary History." *Catharine Maria Sedgwick: Critical Perspectives*. 5-16.
- Kelley, Mary, ed. *The Power of Her Sympathy: The Autobiography and Journal of Catharine Maria Sedgwick*. Boston: Massachusetts Historical Society, 1993.
- Kenslea, Timothy. *The Sedgwicks in Love: Courtship, Engagement, and Marriage in the Early Republic*. Boston: Northeastern UP, 2006.
- Knadler, Stephen P. *The Fugitive Race: Minority Writers Resisting Whiteness*. Jackson: UP of Mississippi, 2002.

- Lunardini, Christine A., *Women's Rights*. Phoenix: Oryx P., 1996.
- Martineau, Harriet. "Essays on the Art of Thinking." *Miscellanies*, vol. 1. Boston: Hilliard, Gray, and Company, 1836. 57-121.
- . *Harriet Martineau's Autobiography*. Ed. Maria Weston Chapman. 2 vols. Boston: James R. Osgood & Co., 1877.
- . "Miss Sedgwick's Works." *London and Westminster Review*, vol. 28 (October 1837): 42-65.
- . *Retrospect of Western Travel*. Vol. II. London: Saunders and Otley, 1837.
- . *Society in America*. 2 vols. London: Saunders and Otley, 1837.
- McKanan, Dan. *Identifying the Image of God: Radical Christians and Nonviolent Power in the Antebellum United States*. New York: Oxford UP, 2002.
- Nakamura, Masahiro. "Versions of *Yamoyden*: Native Americans in Early Nineteenth-Century Narratives." *Arizona Quarterly*, vol. 70 (Autumn, 2014): 129-56.
- Neff, Wanda Fraiken. *Victorian Working Women: An Historical and Literary Study of Women in British Industries and Professions, 1832-1850*. New York: Columbia UP, 1929.
- Pearsall, Marilyn. *The Other Within Us: Feminist Explorations of Women and Aging*. Boulder: Westview, 1997.
- Rogers, Cleveland and Rebecca B. Rankin. *New York: the World's Capital City: Its Development and Contributions to Progress*. New York: Harper, 1948.
- Sedgwick, Catharine Maria. *Clarence; or, A Tale of Our Own Times*. Eds. Melissa J. Homestead and Ellen A. Foster. 1830. Petersborough, Ontario: Broadview, 2012.
- . *Letters from Abroad to Kindred at Home*. 2 vols. New York: Harper & Brothers, 1841.
- . *Life and Letters of Catharine M. Sedgwick*. Ed. Mary E. Dewey. New York: Harper & Brothers, 1871.
- . *The Linwoods; or, "Sixty Years Since" in America*. 2 vols. New York: Harper

- & Brothers, 1835.
- . "Mary Dyer." *The Token* (Boston, 1831): 294-312.
- . *A New-England Tale*. 1822. New York: Penguin, 2003.
- . *Redwood: A Tale*. 2 vols. New York: E. Bliss and E. White, 1824.
- . "A Reminiscence of Federalism." *The Token* (Boston, 1834), 102-143, rpt. in *Tales and Sketches*, ser. 1 (Philadelphia, 1835), 9-43.
- . "Slavery in New England." *Bentley's Miscellany*, 34 (Oct. 1853): 417-424.
- Sobo, Elisa J. and Sandra Bell. *Celibacy, Culture, and Society: The Anthropology of Sexual Abstinence*. Madison: U of Wisconsin P, 2001.
- Stearns, Bertha-Monica. "Miss Sedgwick Observes Harriet Martineau." *New England Quarterly*, vol. 7, no. 3 (1934): 533-41.
- Thornton, Bruce S. and Victor Davis Hanson. "'The Western Cincinnatus': Washington as Farmer and Soldier." *Patriot Sage: George Washington and the American Political Tradition*. Eds. Gary L. Gregg II and Matthew Spalding. Wilmington: ISI Books, 1999. 39-60.
- Webb, R. K. *Harriet Martineau, a Radical Victorian*. New York: Columbia UP, 1960.
- Weierman, Karen Woods. "'A Slave Story I Began and Abandoned': Sedgwick's Antislavery Manuscript." *Catharine Maria Sedgwick: Critical Perspectives*. 122-37.
- Whitson, Robley Edward. *The Shakers: Two Centuries of Spiritual Reflection*. New York: Paulist, 1983.
- 中村正廣 「ホーソーと南部」 安武知子他編、『ことばとコミュニケーションのフォーラム』（開拓社、2011）：253-65.